

特集

病気をもつ 子どもの セクシュアリティ支援

特集に
あたって

病気をもつ子どもの セクシュアリティ支援を考える

小児医療の進歩により、救命できる子どもが増えた一方で、原疾患の継続的治療や合併症治療、長期に医学的経過観察を要する子どもが増えている。医療を必要とする思春期、さらには成人期を迎えた患者は、原疾患や合併症の病態生理が年齢とともに変化し、成人の病態比重が増えていくため、小児期から成人期への移行支援が必要である。2014(平成26)年に小児科学会より「小児期発症疾患を有する患者の移行期医療に関する提言」が発表されたが、小児期から個々の患者にふさわしい成人期の医療への移行支援(成人移行支援)は、いまだ発展途上である。そして成人移行支援には、身体、精神、心理、社会といった多面的支援や、患者および家族に対する自立/自律支援が必要である。

筆者は、長きにわたり小児がん長期フォローアップ外来の看護面談を専任してきた。多くの小児がん経験者の成人移行支援に携わってきたなかで、彼らに対するセクシュアリティ教育・支援・介入が不十分であることを痛感している。その背景には、彼らは継続的治療を余儀なくされ、年齢相応の恋愛体験が不足していること、各々の病気に関連した性に関する必要な知識が提供されていないことが考えられる。また、病気を理由に人を好きになることに対して消極的になっていたり、傷跡や合併症をコンプレックスに感じて、自分には恋愛ができないと諦めている患者にも遭遇した。

さらにこの問題は、小児がん経験者だけの問題ではないことも実感している。小児専門病院に従事するなかで、あらゆる慢性疾患を抱えた子どもの成人移行支援にはセクシュアリティに対する支援が必要だと感じている。「人工肛門を造設している人や腹膜透析をしている人はどうやってセックスするのか?」「造血幹細胞移植治療を受けた人は、避妊しないでセックスしていいのか?」「慢性疾患をもつ性的少数者(セクシュアルマイノリティ)には、どのような知識や理解が必要なのか?」など、これからの成人移行支援には、患者それぞれに適したセクシュアリティ支援を検討する必要があると考える。セクシュアルアイデンティティを確立することは、他者との関係を構築し、自尊感情や自己肯定感を育むためにも必要な成長・発達である。

本特集が、小児医療の現場において、さまざまな視点からセクシュアリティ支援に必要な知識を深めるとともに、慢性疾患を抱える子どもに対するセクシュアリティ問題を提起することで、医療者にできることは何かを考える機会になればと期待している。

※筆者の「セクシュアリティ」の定義については、p 1392を参照

静岡県立こども病院がん化学療法看護係長/
がん化学療法看護認定看護師

加藤由香 Kato Yuka